



TITLE:

# メランコリーの精神分析的研究 - フロイト、アブラハムからラドー へ -

AUTHOR(S):

松山, あゆみ

---

CITATION:

松山, あゆみ. メランコリーの精神分析的研究 - フロイト、アブラハムからラドーへ -. 文  
明構造論 : 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2010,  
6: 35-53

ISSUE DATE:

2010-09-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/126712>

RIGHT:

## メランコリーの精神分析的研究 —フロイト、アブラハムからラドーへ—

松 山 あゆみ

はじめに

精神分析理論におけるメランコリー論は、精神医学のそれと比較すると数少ないものであるが、「ナルシスの同一化 (narzisstische Identifizierung)」という精神分析特有の概念の導入によって、精神医学の既存のメランコリー研究に新生面を開いたと言えるだろう。そのメランコリー論の雛形となっているのは、当然のことながら精神分析の祖であるジークムント・フロイト (1856-1939) の論稿「喪とメランコリー」<sup>1</sup> (1917 [1915]) である。これは、フロイトがメランコリーを主題として公表した唯一の論稿である。その後のフロイトの著作においてもメランコリーへの言及が散見されるが、それらはみな、この論に基づくものである。

そしてこのメランコリー論に影響を与えた人物はフロイトの高弟カール・アブラハム<sup>2</sup> (1877-1925) である。彼はフロイトに先駆けて、メランコリー論を発表している。それは、1911年にヴァイマルで開かれた第3回国際精神分析会議における講演「躁うつ病およびその

---

<sup>1</sup> Freud, Sigmund: Trauer und Melancholie (1917 [1915]). In: *Gesammelte Werke*, Bd. X, Anna Freud et al. (Hgg.), London 1946, S. 427-446. 以下 *G. W.* と略記する。Trauer は「喪」という訳語以外に「悲哀」や「哀悼」などといった訳語が当てられている。精神分析の用語においては、Trauer は愛する対象を喪失した哀しみを意味し、その喪失感に重点が置かれるため「喪」と訳されることが多い。

<sup>2</sup> ブレーメン出身のユダヤ人医師。精神分裂病 (Schizophrenie) という病名を提唱したスイスの医師オイゲン・ブローラー (1857-1939) が運営していた精神病院ブルクヘルツリに 1904 年に招聘され、そこでカール・グスタフ・ユング (1875-1961) らと出会い、フロイトの論に親しむようになる。そして 1907 年からフロイトとの文通が始まり、このやり取りはアブラハムが亡くなるまで続いた。アブラハムは、ブルクヘルツリで助手を務めた後、ベルリンで開業し、精神分析に専念する。この頃からメランコリーなどの課題に取り組むようになり、彼の考えはフロイトのメランコリー概念に多大な影響を及ぼすことになる。1910 年には、国際精神分析協会の最初の支部であるベルリン精神分析協会を設立した。その後、戦争でいったんベルリンを離れることになるが、1918 年には帰還し、最後まで精神分析の発展に尽力した。彼は死の直前まで (1924-1925)、クラインを分析し (クラインにとって第 2 の教育分析)、彼女の論に大きな影響を与えた。

類似状態の精神分析的研究と治療のための端緒」<sup>3</sup>である。ここではメランコリーにおける「ナルシス的同一化」の問題はまだ扱われていないが、サディズムとメランコリーとの関係がすでに示されている。また、アブラハムは「喪とメランコリー」の公表前の原稿をフロイトから受け取り、1915年3月31日の手紙でさまざまな見解を述べている。ここにおいてもリビード発達段階の口唇期および食人期とメランコリーのサディズムとの関係を強調している。<sup>4</sup>そしてこの助言はフロイトの最終原稿に取り入れられることになる。このような背景から、フロイトのメランコリー論には、アブラハムの見解が大きく影響していることがわかるだろう。

フロイトはこれ以後、メタサイコロジーを飛躍的に展開させ、いわゆる第2局所論（エス、自我、超自我）および新たな欲動論（生の欲動と死の欲動）を精神分析理論に導入する。それゆえ、従来の理論は見直され、修正された。これに伴ってフロイトのメランコリー概念も当然のことながら変容を被ることになる。メランコリーを主題とした論稿は、先に述べたように「喪とメランコリー」のみだが、フロイトは1920年代に入り矢継ぎ早に著作を出版し、それとともにメランコリーに対する言及も急増した。なかでも『集団心理学と自我分析』<sup>5</sup>（1921）および『自我とエス』<sup>6</sup>（1923）においては、メランコリーに関して多くの紙面が割かれており、その内容は一つのメランコリー論と呼べるようなものである。

これらと同時期に、アブラハムは「心的障害の精神分析に基づくリビード発達史論」<sup>7</sup>（1924）を発表し、そのメランコリー論を発展させた。これは、フロイトが論じたリビードの発達段階を細分化し、どの段階にメランコリー患者のリビードが退行するのかを改めて提示したものである。また豊富な臨床例によってフロイトの論の実証が試みられている。

フロイトとアブラハムのメランコリー論は、その後のメランコリーの精神分析的研究において必ず参照される基本文献となっているが、彼らのメランコリー論にいち早く反応したのが、ラドーであった。彼は1927年9月1日にインスブルックで開催された第10回国際精神分析会

---

<sup>3</sup> Abraham, Karl: Ansätze zur psychoanalytischen Erforschung und Behandlung des manisch-depressiven Irreseins und verwandter Zustände (1912 [1911]). In: *Psychoanalytische Studien*, Bd. II, Frankfurt am Main 1971, S. 146-162.

<sup>4</sup> Vgl. Freud, Sigmund/Abraham, Karl: *Sigmund Freud/Karl Abraham Briefe 1907-1926*. Hilda C. Abraham und Ernst L. Freud (Hgg.). Frankfurt am Main 1965, S. 202-204.

<sup>5</sup> Freud, Sigmund: Massenpsychologie und Ich-Analyse (1921). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 71-161.

<sup>6</sup> Freud, Sigmund: Das Ich und das Es (1923). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 235-289.

<sup>7</sup> Abraham, Karl: Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido auf Grund der Psychoanalyse seelischer Störungen (1924 [1923]). In: *Psychoanalytische Studien*, Bd. I, Frankfurt am Main 1969, S. 113-183.

議で「メランコリーの問題」<sup>8</sup> という表題の講演を行った。ここにおいて彼は、フロイトとアブラハム同様、メランコリーにおける愛の対象との同一化の問題を取り上げたが、さらに一つの対象を「愛する対象」と「悪い対象」に分けて自我に取り入れる「二重の取り込み（体内化）」について初めて指摘した。<sup>9</sup> そしてこれがメランコリー患者のナルシズムの修復（治癒）の過程であるというラディカルな見解を示した。ラドーのこの報告に対し、フロイトは、同年の10月16日付けの手紙で次のように意見している。

あなたの報告の二つの点がまったく明瞭でないように思われます。そのうちの一つは罪責感の起源です。<sup>10</sup>

フロイトは二つの点のうちこの一点にしか触れず、筆を擱いている。<sup>11</sup> この手紙はほんの数行のものであり、フロイトはほとんど何の反応も示していない。フロイトのこのような軽い批評にもかかわらず、<sup>12</sup> ラドーのこの研究は、フロイトとアブラハムの論を踏まえつつも、彼らとは違った視点からメランコリーを論じ、後のメランコリー（うつ病）の精神分析的研究（クライン、ジェイコブソンなど）に影響を及ぼした画期的なものだと思われる。しかしながら、ラドーのメランコリー論はフロイトとアブラハムの論の陰に隠れ、これまでほとんど注目されてこなかった。<sup>13</sup> 本稿では、フロイト、アブラハム、ラドーという同時代の精神分析家のメラ

<sup>8</sup> Radó, Sándor: Das Problem der Melancholie. In: *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, Bd. XIII, Leipzig/Wien 1927, S. 439-455.

<sup>9</sup> うつ病に関する体系的な精神分析的研究を残したジェイコブソンはラドーの見解である「二重の取り込み」を重視し、自らの著作において若干の修正を施した。エディス・ジェイコブソン『うつ病の精神分析』（牛島定信他訳、岩崎学術出版社、1983年）、156頁参照（原著：Jacobson, Edith: *Depression. Comparative studies of normal, neurotic, and psychotic conditions*. New York 1971）。

<sup>10</sup> Roazen, Paul/Swerdloff, Bluma: *Heresy: Sándor Rado and the Psychoanalytic Movement*. London 1995, p. 164. この手紙では、ラドーの論文のタイトルが明示されていないが、内容および日付から「メランコリーの問題」に対する見解だと推測できる。また、フロイトはちょうどこの頃、「ある錯覚の未来」を上梓し、罪責感の起源についての考察を深めていた。

<sup>11</sup> この手紙に対するラドーの返事がどのようなものだったかは残念ながらわからない。ラドーからフロイト宛の書簡は出版されていないからである。

<sup>12</sup> ここで「軽い」という表現を用いたのは、フロイトは、たとえばアブラハムやフェレンツィから論稿を受け取った場合、長文の返事をしたため詳細な意見を述べているからである。

<sup>13</sup> 日本においては、精神分析の辞典類（訳書も含む）にもラドーの名は紹介されていない。北田穰之介が1991年に雑誌『imago』の躁うつ病特集でラドーのメランコリー論を紹介しているが、これも1頁ほどの簡単なものである（北田穰之介「うつ病の精神分析理論—K. アブラハムから E. ジェイコブソンまで—」『imago』Vol. 2-11、青土社、1991年、111-112頁参照）。

ンコリー論を比較検討することにより、これまで脚光を浴びてこなかったラドーの論のラディカルな面を浮き彫りにすることを目指す。

## 1. ラドーとは誰か

精神分析運動史のなかにその名が燦然と輝くはずだったラドーの名を、現在わが国においてどれほどの人が知っているだろうか。ラドー・シャーンドル (1890-1972)、彼の夢は精神分析を医学の一分野にすることだった。<sup>14</sup>

1890年、ハンガリー北東部の裕福な中産階級の家生まれた赤ん坊は、やがて政治学と法学を学び、さらには医学を志すようになる。医学生時代にラドーはフェレンツィ・シャーンドル (1873-1933) との運命的な出会いを果たす。この出会いのときにはすでに、医学界で物議を醸していた精神分析の書、すなわちフロイトの著作をラドーは熟読しており、フロイトの著作の生き字引と化していた。ラドーの驚異的な記憶の才能を最初に認めたのは、フェレンツィだった。フェレンツィは当時すでにフロイトと親しい間柄だったので、ラドーをフロイトその人に紹介するのにさほど時間はかからなかった。1913年、国際精神分析協会のブダペスト支部がフェレンツィによって設立されると同時にラドーは二十歳そこそこでその秘書を務めることになる。同年、ラドーはフロイトの講義を受けるためウィーンへ行くようにフェレンツィに勧められ、フロイトとの初対面を果たす。ラドーはブダペストへ戻り、フェレンツィに詳細な報告を行った。フェレンツィはフロイトから草稿をたびたび受け取っていたが、それをラドーとともに読み、議論を繰り返した。このとき二人にとってフロイトは神格化された存在だったのである。そして「精神分析の範囲内ですべては発見できる」という当時の分析家たちの熱狂をラドーも分かち合っていた。

しかし後にラドーは、精神分析が医学から遠のき、閉鎖的になるのを危惧した。そしてフロイトの著作をドグマ化することによって精神分析がカルトになることを恐れ、フロイトの理論をつねに改良し修正すべきだと考えるようになった。その一方で、フロイトが非としていたメラニー・クライン (1882-1960) の論には、激しく異議を申し立て、結果的には正統派保守の

---

<sup>14</sup> ラドーの生涯に関しては以下の文献を参照。Roazen, Paul: *Freud and His Followers*. USA 1975. Roazen, Paul / Swerdloff, Bluma: *Heresy: Sandor Rado and the Psychoanalytic Movement* London 1995 (この文献は、ラドーから実際にインタビューが取られ、オーラルヒストリーとしてまとめられた貴重なものである。著者たちは、異端者と見なされてきたラドーを精神分析運動史のなかに正当に位置づけることを目的としている)。

一人と見なされるようにもなった。彼のフロイトに対する態度はつねにアンビヴァレントなものだったのである。

ブダペスト支部で数年秘書を務めた後、彼はベルリンへ赴いた。1922年から1931年までは、アブラハムが創設したベルリン精神分析研究所の組織運営（カリキュラムの作成など）に携わり、またそこで教育者としての役割も果たした。最初の2年ほどはアブラハムから分析を受けるが、その分析はなかなかうまく進まなかった。ラドーは母子関係に問題があるという分析がなされたが、アブラハムの死により分析は中断されてしまった。その後ラドーはさまざまな人物に教育分析を施すようになる。そのなかには、自我心理学の代表的人物ハインツ・ハルトマン（1894-1970）や性格分析という素晴らしい業績を残しつつも悲劇的な末路をたどったヴィルヘルム・ライヒ（1897-1957）などの著名な人物も含まれている。

ベルリン時代は、精神分析家としてラドーがもっとも輝いていた時期であり、1924年には、ニューヨークへ渡ったオットー・ランク（1884-1939）の穴を埋めるべく<sup>15</sup>『国際精神分析雑誌』の編集委員にフロイト自らによって大抜擢された。これとともに編集局はウィーンからベルリンに移され、ラドーはフロイトのお膝元のウィーンの分析家たちの嫉妬を買うことになった。いかなる嫉妬を買おうとも1939年までラドーはすべての編集の仕事に熱心に取り組んだ。この業績に対してフロイトは「精神分析のためにもっとも偉大で非利己的な仕事をしている」<sup>16</sup>と賛辞を述べた。

しかしこのようなフロイトとの関係に決定的な亀裂が走ったのは、1935年のジャンヌ・ランブル＝ド・フロート（フロイトによって分析を受けた女性分析家）のラドーの著書『女性の去勢不安』<sup>17</sup>（1934 [1933]）に対する批判的な書評が出されたときである。この書評はフロイトも承知していたことであった。ラドーの著作は、フロイトが容認できるものではなかったのである。こうしたフロイトの態度にラドーは、自分のこれまでしてきた仕事すべてが軽んじら

<sup>15</sup> ランクはフロイトにとって息子のような存在だったが、彼が主張した出産外傷説（1924）により、二人は徐々に決別の道をたどることになる。

<sup>16</sup> Roazen, Paul/Swerdloff, Bluma, p. 70. しかしながら、これほど業績のあるラドーに対するフロイトの言及は、フェレンツィ宛の書簡にもアブラハム宛の手紙にも、さらには全集にもほとんど見られない。

<sup>17</sup> Radó, Sándor: Die Kastrationsangst des Weibes. Wien 1934. この著作では、ペニスの不在を女兒が発見することで生じる性器期のマゾヒズムが、自我のナルシシスの防衛反応を起し、ペニスを持つファンタジーへと導かれるということが語られており、ファンタジーにおいてペニスを所有した女性は自我において去勢不安を感じるようになるという主張がなされている。フロイトは、女兒は去勢不安を抱くことはできないという見解を持っていたので、ラドーの主張はこれに真っ向から対立するものであった。

れたと感じ、怒りを覚えずにはいられなかった。これ以後フロイトとの距離は精神的にも物理的にも縮まることはなかった。このときラドーはニューヨークにいたのである。それは、ニューヨーク精神分析研究所が指導者としてラドーを 1931 年に招聘したためであった。

そしてラドーはフロイト正統派の「男根中心主義」<sup>18</sup> から解き放たれ、独自の精神分析理論を打ち立て始めた。1941 年にはついにニューヨーク精神分析研究所から解任されてしまうが、1944 年にコロンビア大学医学部に精神分析教育課程が設けられ、ラドーはその初代教育長として迎え入れられた。ここにおいて精神分析を医学の一分野にするというラドーの念願は叶えられたのである。

ラドーの夢が実現したとき、フロイトはすでにこの世を去っていたが、もし生きていたとしても医学の一分野となった精神分析を認めようとは決してしなかっただろう。それは、フロイトの医学に対する批判的言及からも、素人分析を力強く擁護する発言からも、容易に想像できることである。医学に対する態度も正反対で、精神分析理論においても最終的には相容れなかったフロイトとラドー。両者の理論的不一致は、じつはラドーの『女性の去勢不安』が発表される以前から見受けられるものだった。その一つとしてメランコリー論を挙げることができる。以下では、フロイト、そしてフロイトと基本的路線を同じくするアブラハム、最終的にフロイトから逸脱したラドーのメランコリー論を取り上げ、比較検討する。

## 2. ナルシズム

フロイトは「喪とメランコリー」(1917 [1915])において、メランコリー患者に見られる愛の対象との「ナルシス的同一化 (narzisstische Identifizierung)」を重視したが、この同一化の問題に入る前に、ここではまずナルシズムについてのフロイトの論を簡潔にまとめ、ラドーの論との比較を試みたい。

フロイトのナルシズム論(「ナルシズムの導入にむけて」<sup>19</sup> (1914)・『精神分析入門講義』(1916-1917 [1915-1917]) 第 26 講「リビード理論とナルシズム」<sup>20</sup>)によると、ナルシズムとは自他の区別がまだついていない原初の状態のことである。<sup>21</sup> この状態においては、

<sup>18</sup> Roazen, Paul /Swerdloff, Bluma, p. 180. この言葉はフロイト批判の際によく使われるものである。

<sup>19</sup> Freud, Sigmund: Zur Einführung des Narzissmus (1914). In: *G. W.*, Bd. X, S. 137-170.

<sup>20</sup> Freud, Sigmund: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse (1916-1917 [1915-1917]). In: *G. W.*, Bd. XI, S. 427-446.

<sup>21</sup> Vgl. ebd., S. 427-446.

外界に対象を見出すことがまだできていないので、リビードが自我に格納されたままである。これをフロイトは一次的ナルシズムと呼んだ。<sup>22</sup>

このような一次的ナルシズムの状態から人間は成長して外界に対象を発見し、その対象にリビードを向けることになる。しかし対象との関係に問題が生じた場合、愛する対象からすべてのリビードが自我へ引き戻されることによって生じる状態がある。これをフロイトは二次的ナルシズムと呼んだ。これは、一次的ナルシズムの状態へ戻ることを意味しており、二次的ナルシズムとはすなわち、一次的ナルシズムへ退行した状態のことを指している。二次的ナルシズムは一次的ナルシズムの基盤の上に構築されるものとフロイトは考えた。<sup>23</sup>

以上のナルシズム論を踏まえ、「喪とメランコリー」の論稿でフロイトは、メランコリー患者の対象選択はそもそも一次的ナルシズムの基盤の上になされており、それゆえ、対象備給 (Objektbesetzung) が困難になると一次的ナルシズムへと退行 (Regression) すると推論した。つまり、メランコリー患者は二次的ナルシズムの状態に陥っていると考えられたのである。

このようなメランコリー患者の退行に関して、アブラハムは「心的障害の精神分析に基づくリビード発達史論」(1924) において幼児期の両親の愛に対する幻滅という問題を取り上げつつ、次のように論じた。

メランコリー患者においてこのような退行が起こるのはナルシズムの段階への固着があるからである。メランコリーにかかる素質がある人は、幼児期に両親から深い愛の幻滅を味わわれ、幼児のナルシズムが傷つけられた経験があり、幼児は、実際はどうであれ、両親から完全に見捨てられたという印象を持ち抑うつ的になったのである。これはエディプス欲望を克服する前の最初の大きな愛の幻滅であり、成長してからもこれと同じ幻滅を対象関係において繰り返すことになる。幻滅させられると、対象に対する敵意が生まれるが、その怒りは、根源的には患者を幼児期に見捨てたとされる両親に向けられたものである。<sup>24</sup>

アブラハムのメランコリーに対するこのような見解は、フロイトの論稿「喪とメランコリー」に見られる患者と対象との愛情関係の根源を明らかにしたものだと思われる。というのも、フロイトの論稿では、メランコリー患者が対象から傷つけられたり幻滅させられたりすることに

---

<sup>22</sup> Vgl. Freud, Sigmund(1914), S. 137-141.

<sup>23</sup> Vgl. ebd., S. 140.

<sup>24</sup> Vgl. Abraham, Karl(1924 [1923]), S. 147f.



より、愛情関係がぐらつき対象愛から一次的ナルシズムへと退行してしまうということだけが語られていたからである。アブラハムの言うような、両親から深い愛の幻滅を味わわされたことによる幼児期のナルシズムの傷つきを原型とした対象関係の問題にまで、フロイトは考えが及ばなかった。それは、フロイトが臨床においてメランコリー患者を診る機会が少なかったからだと思われる。他方、アブラハムはメランコリー患者の豊富な臨床経験から以上のようなメランコリー患者に共通した「幼児期の愛の幻滅」を見出すことができた。

そしてフロイトとアブラハムのこうした論を、また違った視点から捉えなおしたのが、ラドーであった。ラドーは「メランコリーの問題」(1927)において、抑うつ的な(メランコリーの)素質を備えた人々に見られる高いナルシス的欲望と著しいナルシスの不耐性(Intoleranz)を指摘した。彼らは、普通の人ならば取るに足らないような傷つきや幻滅を味わっただけで、すぐに自己感情の低下を見せる。それは、彼らがまだ自立しておらず、自己評価を他者に委ねているからだと言っている。彼らは愛され、評価され、支えられ、庇護されていると感じるときにのみ、安心と居心地よさを得るのである。彼らの自己評価は、目標達成や理想実現や成功によってなされるのではなく、他者の共感(Anklang)と承認(Anerkennung)が得られるかどうかにかかっている。つまり彼らは、外界からナルシス的満足を提供されることにより自己感情を高めるのである。彼らは、まるで、早期のナルシズムが衝撃を受けた後に、愛する対象への完全な依存において初めて自己感情を取り戻す子供のようなものである。<sup>25</sup> これはフロイトとアブラハムには見られない見解であり、自己評価が他者(愛する対象)に依存していることから生じる抑うつ問題はラドーによって初めて提示されたのである。

先にフロイトのナルシズム論を取り上げたが、ここで再度見直すことにしよう。ナルシズム論を踏まえて論じられたフロイトのメランコリー論においては、メランコリー患者の対象選択がそもそも一次的ナルシズムの基盤の上になされているということが示された。では、一次的ナルシズムの基盤の上になされる対象選択とは、いったいどのようなものであろうか。この対象選択についてもフロイトは自らのナルシズム論において説明している。これは、ナルシス型対象選択と呼ばれるものであり、「自分自身を手本として性的対象を選択する型」<sup>26</sup> の

---

<sup>25</sup> Vgl. Radó, Sándor(1927), S. 440f.

<sup>26</sup> 精神分析によりこのような対象選択が観察されたことが、フロイトにとってナルシズムの存在を想定せざるを得ない最大の動機となった。

ことである。この対象選択は、女性、特に美女においてなされやすい。美女は成長するに従って自分の美しさに自己満足を得るため、厳密な意味においては自分だけを愛する。つまり、このような女性が求めているのは、愛することではなく、愛されることであり、この条件を満たす男性のみを受け入れる。このようにナルシズムを維持する女性は、ナルシズムを最大限に放棄する男性にとって、非常に強い魅力を持っているのである。人はナルシス型にならって、**a)** 現在の自分（自己自身）を、**b)** 過去の自分を、**c)** なりたい自分を、**d)** 自己自身の一部であった人物を愛する。<sup>27</sup>

フロイトのこの論からわかることは、メランコリーにかかる素質のある者の対象選択はナルシス型のものであり、幼児期の一次的ナルシズムの状態に退行しやすいということである。フロイトによって示されたメランコリー患者におけるナルシス型対象選択の特徴を、ラドーは自らのメランコリー論において具体的にこう描写した。

彼ら（抑うつ症患者たち）は、自分に対する好意と愛の証を飽くことなく対象に求め続ける。……しかし、その人物の好意と献身を確信し、より確固たる関係に達するや否や、彼らの振る舞いは完全に変化してしまう。彼らは対象の愛の献身をずうずうしく尊大にも当然のことにように受け取り、だんだん横柄に自分勝手になり、そして彼らの振る舞いが暴虐の限りを尽くすまで、存分にエゴイズムを剥き出しにするのである。<sup>28</sup>

このような暴挙は、愛の対象の喪失により、患者の内界に向けかえられ、抑うつ状態を引き起こすことになる。メランコリーにおいてこうした向けかえが起こるのは、フロイトとアブラハムの論では、自我が対象を取り込んでナルシス的同一化（体内化）を達成するからである。しかしながら、ラドーは「フロイトがメランコリーにおける向けかえの原因とした対象の取り込みをひとまず度外視しよう」<sup>29</sup>（傍点筆者）と宣言し、メランコリー患者の対象喪失に対する反応を別の視点からまずは理解しようと試みた。

ラドーによると、対象を失った患者の自我は、対象を再び取り戻すために罪を悔い改め、赦しを請う。ラドー曰く、メランコリーは「愛を求める大いなる絶望の叫び（grosser

---

<sup>27</sup> Vgl. Freud, Sigmund(1914), S. 153-157.

<sup>28</sup> Radó, Sándor(1927), S. 441f

<sup>29</sup> Ebd., S. 142.

Verzweiflungsschrei nach Liebe)」<sup>30</sup>である。ラドーは、対象の取り込みに先立って、後悔に打ちひしがれて対象の赦しを請い、その愛を求める動きが自我にあると考えたのである。そしてさらにラドーはこう考えた。メランコリー患者は対象の愛を巡る闘いを新たな舞台へ移し、ナルシスの心に心の内界へと撤退するのだと。患者の対象との関係は、ナルシ的に愛されたいという願いが支配的であったが、この追求は患者の内界における超自我との関係にたやすく引き継がれ、メランコリー患者は対象に代わって超自我の赦しと愛を求めるのである。以上の過程をラドーは次のようにまとめている。

それ（メランコリーの過程）は、対象との葛藤に間違った立場で耐え抜こうと試みて対象関係から超自我との関係へナルシ的に逃避し、この退行的な歩みによって自我を現実から引き離す過程である。<sup>31</sup>

このようなメランコリーの過程は、幼児期の超自我の形成の際にすでに演じられたことではないかとラドーは推論し、その過程をさらに論じている。しかしながら、この論述の立ち入った考察を行う前に、フロイトとアブラハムのメランコリー論における同一化・体内化の問題を取り上げ、さらに同一化が超自我形成にいかに関わっているのかを見ていくことにしよう。この文脈においてラドーが主張した「二重の取り込み（体内化）」こそ、フロイト、アブラハム両者の理論とラドーの理論を分かつ決定的な点なのである。

### 3. 同一化・体内化

フロイトは、前章の冒頭で述べたように「喪とメランコリー」においてメランコリー患者のナルシ的同一化を重視した。ナルシ的同一化は、二次的ナルシズムの状態において達成される同一化のことである。<sup>32</sup> この同一化はフロイトによると以下のようにして起こる。

まず、患者が愛する対象から傷つけられたり幻滅させられたりすることで、対象関係がぐらつき、対象へ向けられていたリビードが自我へ引き戻される。そのリビードを使用することに

<sup>30</sup> Ebd. この論文が掲載された雑誌にラドー自身のもう一つの論文「ある不安な母親」も載せられており、ここにおいてもラドーはこの表現を用いている。

<sup>31</sup> Ebd., S. 442f.

<sup>32</sup> Freud, Sigmund(1916-1917 [1915-1917]), S. 443.

よって、自我と対象との同一化がなされる。そして同一化した対象は愛の備給の代理 (Ersatz) となる。すなわちメランコリー患者は対象を同一化することによってその対象の代理を自我のうちに作り、自我は対象との関係を断念する必要がなくなるのである。このようなナルシズムへの退行によって達成される「同一化」とは、本来は対象選択の前段階であり、自我がある対象を他の対象から際立たせるアンビヴァレントな最初の方法である。自我はこの対象を体内化 (einverleiben) しようとする。これは、リビードの発達段階の口唇期または食人期にあたり、この時期への退行をフロイトはメランコリーの特徴として仮定した。<sup>33</sup>

本稿のはじめに触れたことだが、メランコリーにおける食人期への退行をフロイトに示唆したのはアブラハムであった。彼はフロイトのメランコリー論を踏まえて、メランコリーに対する自らの洞察をさらに深めていった。彼の洞察が見事に結晶化されたものが、先ほどから取り上げている 1924 年の論稿「心的障害の精神分析に基づくリビード発達史論」である。ここでは、アブラハムが分析したメランコリー患者の豊富な臨床例から、フロイトのメランコリー論の実証が試みられている。さらにアブラハムは、フロイトの性理論におけるリビード発達段階を細分化し、メランコリー患者のリビードが退行する段階を改めて提示しなおしている。

アブラハムは、フロイトが示したリビード発達段階の口唇期と肛門期をそれぞれ前期と後期の二つに分けた。口唇期は、肛門期よりも、対象との同一化をなすリビードの原初的な段階であるが、メランコリー患者はまず、肛門期へ退行する。アブラハムはこの肛門期を前期と後期に分けたわけだが、前期においては対象の絶滅という敵対的な志向が強く、後期においては、対象を支配しようとする保存的な傾向が強まる。愛する対象とのアンビヴァレントな葛藤が生じると、メランコリーの場合は肛門期前期への退行がまず起こり、対象を破壊して排泄しようとする。

この結果、メランコリー患者の内界において対象の喪失が生じるが、それを意識することはできない。そしてこの喪失に対する防衛が働き、さらに口唇期へと退行する。アブラハムによって新たに設けられた口唇期の区分では、前期が母親の乳房という対象を吸うことで体内化する段階である。この段階においてはまだ自我と対象との区別がなく、乳を吸う子供とこれに栄養を与える乳房との対立はない。対立が見られないのは乳を吸っても対象はなくならないからである。ここには当然、対象とのアンビヴァレントな関係は存在しない。これに対し、後期に

<sup>33</sup> フロイトはこの仮定が臨床的観察において証明されていないということを付け加えている。Vgl. Freud, Sigmund(1917 [1915]), S. 436.

は、アンビヴァレントな葛藤が生じる。なぜなら、この段階では、吸うことから嘔むという口の機能の転向があり、対象を嘔んで食らうことで体内化を果たすからである。すなわち、この食人的な段階では、愛する対象を食らい絶滅させてしまうのである。メランコリーが肛門期前期への退行を果たした後にさらに退行する原初的な段階は、この口唇期後期である。メランコリー患者は喪失した対象を食らい尽くすことで再び体内化しようとする。<sup>34</sup>

以上、フロイトとアブラハムの論におけるメランコリー患者の対象との同一化および体内化の問題を、リビード発達史論を通して見てきたが、フロイトは、1920年代に入り、「エス」と「超自我」という概念を導入したことにより、メランコリーで見られた同一化がじつは幼時の人格の形成において重要な意味を持つという見解に達した。フロイトは自らの著作『自我とエス』(1923)において、論稿「喪とメランコリー」(1917 [1915])を発表した当時は、メランコリーにおいて失われた対象が自我の中に再建され、対象備給が同一化によって置き換えられるという過程が持っている十全な意義をまだ自覚できていなかったと反省している。こうした反省のもと、フロイトは、同一化と対象備給とが口唇期においては区別できない状態にあるという推察を改めて述べ、新たに導入したエスの概念を用いてメランコリーの同一化を分析し直している。

口唇期より後の時期になり、エスが性愛的追求を欲求として感じ取るようになると、対象備給が行われるが、性的対象を断念しなければならない場合には、自我変容 (Ichveränderung) が生じるとフロイトは考えた。メランコリーの場合では、口唇期への退行が起こることにより、同一化を通して、自我の中に対象を作ること的自我は現実の対象を放棄することができるが、フロイトはこうした考えをさらに発展させ、同一化がそもそも、エスにその対象を断念させる条件になっているのではないかと推察した。<sup>35</sup> こうした同一化の過程は、早期の成長段階において頻繁に起こることであり、自我の性格というもの、かつて断念された対象備給の沈殿で

<sup>34</sup> Vgl. Abraham, Karl(1924 [1923]), S. 134-142.

<sup>35</sup> 別の観点から見ると、同一化、すなわち、性的な対象選択を自我変容に転化することは、自我がエスを制御し、エスとの関係を深める一つの方策だということにもなるとフロイトは指摘している。フロイトはこの自我の方策を以下のように説明している。自我は対象の特徴を身にまとい、エスに対して自らを愛の対象として押し付け、エスの損失、すなわち断念された対象の埋め合わせをしようとする、と。このような方策を採ることで、対象リビードは同一化によってナルシシ的なリビードへ転化され、そのリビードは自我に注ぎ込まれる。

あるという可能性をフロイトは指摘した。そしてその沈殿には対象選択の歴史が刻まれているという考えを示したのである。<sup>36</sup>

このような見解から自我の生成過程を垣間見ることができる。自我は、外界を知覚する知覚系を核としてエスから徐々に分化して成長するものであるが、<sup>37</sup> その大部分はエスが断念した対象を同一化することによって形成されている。この同一化の最初のものが超自我となり、自我と対立するようになる。<sup>38</sup> さらに超自我の発生には、じつは太古の時期の父親との同一化が潜んでいるとフロイトは言う。<sup>39</sup>

精神分析において同一化は、他の人格との感情的な結びつき（感情的拘束）の最初期の表れであり、エディプスコンプレクス（Ödipuskomplex）の前史において一つの役割を果たす。男児が父親のようになりたいと思い、父親の代わりを務めたいと思うとき、その子は父親を自分の理想とする。そして、男児は模範として選んだ父親の自我を模倣して自らの自我を形成しようとする。このように男児は父親と同一化するのである。これと同時に、あるいはそれ以前に、男児は、依託型対象選択<sup>40</sup>に従って母親を愛の対象として選択する。つまり、男児において、母親への性的な対象備給と父親への同一化という二つの結びつきが併存することになる。やがて男児は、母親に対する性的欲望が強くなり、父親が邪魔者であるということに気づく。こうしてエディプスコンプレクスが発生することになる。

そうすると、父親との同一化は、敵対的な色調を帯び始め、母親との関係においても父親に取って代わりたいという欲望<sup>41</sup>と一致するようになる。このように同一化は始めからアンビヴァレントなものであり、口唇期に見られる体内化の原型となるものである。口唇期においては

---

<sup>36</sup> Vgl. Freud, Sigmund(1923), S. 256ff

<sup>37</sup> Vgl. ebd., S. 253f

<sup>38</sup> Vgl. ebd., S. 277.

<sup>39</sup> Vgl. ebd., S. 258f

<sup>40</sup> 対象選択において目立つのは、自分の充足経験に基づいて性的対象を選択することである。母親の乳房から乳を吸うときに赤ん坊が得る口唇の性的満足は、生存するのに必須である自己保存の機能と結びついている。言い換えれば、性欲動が自我欲動の充足に依託（Anlehnung）されているということである。このような依託によって、母親やその代理、つまり、子供を養ったり、世話したり、保護したりする人物が最初の性的対象となる。こうした母親の像が手本となり、性的対象が選択されることを依託型対象選択と呼ぶ。これは本来、男性に特有のもので、女性に対する性的過大評価を伴って対象への恋着を生み出す。この状態は、幼児期の原初的ナルシシズムが性的対象に転移された状態である。

<sup>41</sup> 原語は Wunsch であり、願望と訳されることが多いが、日本語版『フロイト全集』に倣い、「欲望」という訳語を選択した。

欲される対象は食べられることにより体内化され、そのものとしては破壊されてしまう。<sup>42</sup> エディプスコンプレクス<sup>43</sup> はやがて崩壊することになるが、その際、母親に対する対象備給は断念される。その代わりに、母親との同一化が生じるか、あるいは父親との同一化がいつそう強められる。<sup>44</sup>

そしてこの同一化によって自我変容が生じ、自我が変容した部分は、特権的地位を保ち、自我理想ないし超自我としてそれ以外の自我の内容と対立する。超自我は、父としての性格を保持し続け、エディプスコンプレクスが激しければ激しいほど、また教育などのもとにその抑圧が行われるのが迅速であればあるほど、後には良心（Gewissen）としていつそう厳格になり、無意識的な罪責感（unbewusstes Schuldgefühl）として自我を支配する。<sup>45</sup>

では次に超自我がメランコリー患者においてどのように振る舞うかを見ていこう。メランコリー患者の超自我は、強力になって意識をのっとり、個人が持っているすべてのサディズムを自分のものにしたかのように、自我に対して異常なほど苛酷さと厳格さを向けることになる。サディズムに関するフロイトの見解に従えば、超自我の中に破壊的成分が堆積して、これが、自我に対して矛先を向けたということになる。この場合、超自我の中で死の欲動が純粹培養された状態になっているのである。<sup>46</sup>

このような状態になった超自我は、怒り狂い強烈に自我を批判するのだが、この際メランコリー患者の自我は自責の念に駆られ、自ら進んで懲罰を受けようとする。自我がこのような事態を甘んじて受けるのは、超自我の怒りが本来向けられるはずの外界の対象を、自我が同一化を通して取り込んでしまったからである。自我が躁へと転化して身を守らない限り、超自我は往々にして自我を死へと駆り立てる。<sup>47</sup>

フロイトによると、ここにおいて見られるメランコリーの死の不安は、自我が自分は超自我

---

<sup>42</sup> Vgl. Freud, Sigmund(1921), S. 115f

<sup>43</sup> ここで示されているものは、単層のエディプスコンプレクスであるが、子供が持っている両性性に依拠したかたちで表と裏の両方を備えた二層のエディプスコンプレクスも存在する。しかし二層のエディプスコンプレクスに触れるにはあまりに議論が錯綜したものになってしまう恐れがあるため、ここではそれに言及することを控えたい。

<sup>44</sup> Vgl. Freud, Sigmund(1923), S. 260.

<sup>45</sup> Vgl. ebd., S. 262f

<sup>46</sup> Vgl. ebd., S. 281.

<sup>47</sup> Vgl. ebd., S. 281-283.

によって愛されておらず、憎まれ責められていると感じるがゆえに自らを放棄することである。自我にとって生（Leben）とは超自我によって愛されることである。なぜなら超自我はかつて父が持っていた庇護的・救済的機能を代表するものだからである。自我は超自我から責められることにより、あらゆる庇護から見放されたと見なし、自らを死に追いやるのである。<sup>48</sup>

フロイトのメランコリー論（『自我とエス』）における同一化の問題を中心にこれまで見てきたが、同一化が自我と超自我の生成に深く関わっているということが確認でき、メランコリーにおいては、超自我が自我を責めさいなむという機制が存在するというものを把握できたことと思われる。

ラドーの論に話を戻そう。ラドーはメランコリーの過程が幼児期の超自我形成の際にすでに演じられていたことではないかと推論したということに前章のおわりで触れたが、それは超自我形成期に幼児が体験した両親の処罰のことを指している。

子供が悪いことをしたときに両親はとても怒るが、この怒りを静めるために子供は罰を受け、赦しを請わなければならないことを理解する。そして次に悪いことをした際には、両親の赦しを即座に得るために、自ら罪を悔い改め、自らを罰するということを子供ながら考えるようになる。幼児期のこのような出来事は、成長してからも自らの了解を得ないで勝手に再生されるようになることは、想像に難くないとラドーは言う。すなわち患者の内界では、愛を望むとき、両親の処罰が無意識的に再生されるようになるのである。さらに、このような無意識的な修復の試みを動機づけているのは、両親に見放されるというような謂れのない（罪のない）ナルシスの傷つきではないかとラドーは推察した。<sup>49</sup> そして、こうした両親の処罰の能動的な再生は、もはや両親に対して行われるのではなく、無意識的に超自我に対して実行に移される。<sup>50</sup> すなわち、メランコリー患者に見られる自己処罰は、ラドーによれば、超自我形成期に幼児が体験した両親の処罰をモデルにしたものなのである。

またさらに、ラドーはこうした自己処罰に「罪 - 償い - 赦し」という意味連関を見出し、これはわれわれの心的生活に深く刻印されたものとした。これは、乳児の「怒り - 空腹 - 母乳

---

<sup>48</sup> Vgl. ebd., S. 288.

<sup>49</sup> これはアブラハムの提示した「幼児期の両親の愛に対する幻滅」についての論述を踏まえたものと思われる。

<sup>50</sup> Vgl. Radó, Sándor(1927), S.443.



を飲む」という一連の体験に対応するものであるともラドーは指摘している。乳児は母親がいなくなるときに栄養摂取への欲求が目覚め、激しく怒り泣き叫ぶ。乳児はその寄る辺なさゆえにこのような反応を示し、それによって疲れ果て、完全に空腹の苦痛の餌食になってしまう。しかし、このような残虐な体験の後には、母親が再び現れて乳を飲ませてくれる。このことによって乳児は口唇ナルシス的な至福を味わうことができるのである。乳児はこのようなサイクルを心的生活に刻印するのである。そしてこの空腹の苦痛が自己処罰の原機制（Urmechanismus）であることをラドーは示し、メランコリー患者に見られる餓死に対する貧困不安はここからくるものであるとした。<sup>51</sup> 貧困不安に関しては、アブラハムのメランコリー論においてすでに述べられていたものであるが、ラドーが明示したような乳児の一連の体験には、アブラハムは目を向けていなかった。また、アブラハムが、メランコリーの固着はリビド発達段階の口唇期後期（食人期）にあるとしたのに対し、ラドーは、乳児の空腹時により近い場にあるという見解を示した。すなわちそれは、母乳を吸う時期に当たる口唇期前期を意味している。

ただし、メランコリー患者の固着が大卒においては口唇期にあるという見解は、フロイト、アブラハム、ラドーの三者に共通している。そしてまた、乳児が乳を飲むのは口唇期における体内化の行為だという点でも三者の考えは一致している。しかし、以下の点において、フロイト、アブラハムの両者とラドーのメランコリー論は決定的に異なった様相を呈する。フロイトとアブラハムにおいては、体内化の対象となる乳をくれる母は一つの統合した対象として捉えられていた。それに対し、ラドーはラディカルに「対象の二重の表象の取り込み」について論じたのである。

ラドーはまず幼児における対象の体内化の過程を示した。幼児においては、対象が一つの表象に統合されておらず、たとえば同一の母の二つの違った態度、すなわち愛する母と怒る（悪い）母は別々の対象だと捉えられ、二重の表象がそこに存在する。<sup>52</sup> これは、快をもたらすも

<sup>51</sup> Vgl. ebd., S. 444-446.

<sup>52</sup> この論はクラインの論とプライオリティーが争われる点だと思われるが、ラドーとクラインはフェレンツィとアブラハムから多大な影響を受けている。そしてまた、ベルリン精神分析研究所においてラドーとクラインはよく論争していたようである。この点に関しては、ピーター・ゲイ『フロイト』第2巻（鈴木晶訳、みすず書房 2004年）、542頁を参照されたい。ラドーとクラインの論争に鑑みると、彼らは互いに批判し合いながらも、刺激し合い、影響を与え合って、各々の理論を築き上げていったと考えられる。ただし、メランコリー論における対象の二重の取り込みについて論じたのは、ラドーが最初の人物である。また、クラインは、1929年の論文「子供の遊びにおける人格化」において、ラドーの論を註でだが、いち早く取り上げており、1932年の『児童の精神分析』においても、1935年の「躁うつ状態の心因論に関する寄与」にお

のが知覚され、不快なものは無視されるという快原理の影響によるものだとラドーは述べ、フロイトの論に沿った議論をしていることを表面的に示した。さらに幼児における愛する母親と悪い母親の二重の表象は、欲動生活のアンビヴァレンツに結びついているとラドーは言う。すなわち、愛する母親と悪い母親は、幼児の愛と憎しみによって分離された対象となるのである。幼児における超自我の形成は、愛する母のみにしたいという幼児の願望の実現の試みであり、愛する母や愛する父に対する憧憬が、去勢の脅迫や苦痛な処罰によって強められ、超自我が形成されるのである。<sup>53</sup>

ラドーは自らの見解を、フロイトによる超自我形成の洞察を「少し修正した理解」<sup>54</sup> だとしているが、これはフロイトの精神分析理論の核心部を覆すような大きな修正である。フロイトとラドー、この両者の違いを際立たせるため、あえて両者の論を単純化する。フロイトにおいては、超自我形成は、エディプスコンプレックスの崩壊の際に自我が強大な父を取り込んで同一化することにより達成される。それに対してラドーにおける超自我形成は、愛する母を取り込んで体内化することにより達成されるものである。このラドーの論は、エディプスコンプレックス以前に超自我が形成されていることを示していると考えられる。また、フロイトにおいて力点が置かれていた父子関係に代わり、ラドーの論では母子関係に重点が置かれているということは明白である。<sup>55</sup> ラドーが母子関係を重視したのは、フェレンツィの影響だと思われるが、そればかりでなく、ラドーがアブラハムに分析を受けた際に母子関係の問題があるということに気づかされたからだとも考えられる。<sup>56</sup>

そしてラドーは、メランコリー患者における対象の体内化もまた、二重の体内化（取り込み）であると述べた。メランコリー患者の自我が愛されることを欲する愛の対象は、超自我に取り込まれ、自我はその願いを達成する。それに対し、患者を見捨てた悪い対象は、統合されていた愛の対象から引き裂かれ、自我の代わりに罰を受ける者として自我に体内化される。そしてこの悪い対象は自我の非難をすべて背負わされ、懲らしめられ、最終的には殲滅される。そう

---

いてもラドーの論を引用している。これらの引用から、クラインの理論形成にラドーの論が少なからず寄与したと言ってもよいだろう。

<sup>53</sup> Vgl. ebd., S. 449-451.

<sup>54</sup> Ebd., S. 451.

<sup>55</sup> アブラハムもメランコリー論において母子関係を強調しているが、その強調はエディプスコンプレックスに由来する母親への敵意に置かれているので、アブラハムの論はフロイトのエディプス論から逸脱するものではない。

<sup>56</sup> Vgl. Roazen, Paul /Swerdloff, Bluma, p. 178.

することで自我はサディズム的な満足を得、欲動を使い果たす。その結果、自我は純化され、同時に浄化された対象と互いに愛し合うことで統合がなされ、躁への転換が起こる。そしてこのような過程をラドーはメランコリーにおけるナルシズムの修復（治癒）過程だとする結論にたどり着いたのである。<sup>57</sup>

フロイトにおいてもアブラハムにおいても、メランコリー患者が愛する対象は一つの統合した表象として捉えられており、その対象は自我にのみ取り込まれる。そして両者はメランコリーの躁への転換についても語っているが、ラドーほどには躁のポジティブな意義を見出していないしその機制も明示されていない。フロイトにおいて躁は超自我と自我とが合流した結果起こるものとされているが、なぜそのようなものかは論じられていないのである。<sup>58</sup> アブラハムは、このフロイトの論を補って、超自我が自我に融合されると、ナルシズムが快に満ちたポジティブな段階へ入ることができるとした。<sup>59</sup> アブラハムのこの見解はラドーの論に影響を与えていると考えられるが、ラドーはそこからさらに一步踏み出し、ナルシズムの治癒という点まで論を展開した。この点にラドーの理論のラディカルな面が表れているのである。

## 結びにかえて

ラドーのメランコリー論における母子関係を軸とした超自我形成は、フロイトの父子関係を軸とした超自我形成の論を覆してしまうような革新的なものだったと言えるが、フロイトはラドーの論にほとんど反応を示さなかった。それは、ラドーのメランコリー論が発表された当時、フロイトは実の息子のように可愛がっていたランクとフェレンツィ、両者との軋轢に悩まされていたからだと推察される。彼らはフロイトの論をラドーのものよりさらに根本的に覆すような著作（ランクの1924年の出産外傷説およびフェレンツィの1926年の積極技法）を発表していたのである。彼らの論も母子関係に主軸をおいていたことは有名である。そしてまた、愛弟子であり、ベルリン支部の会長でもあったアブラハムの死（1925年）もフロイトに大きな影を落としたことは明らかである。さらには素人分析の問題もフロイトは抱えていた。このような重大な出来事が重なり、それとともに起こった精神分析協会の内紛の渦中にあったフロイトにとって、ラドーの小論などは取るに足らない問題だったのかもしれない。あるいは、せつかく

---

<sup>57</sup> Vgl. Radó, Sándor(1927), S. 452f.

<sup>58</sup> Vgl. Freud, Sigmund(1921), S. 148.

<sup>59</sup> Vgl. Abraham, Karl(1924 [1923]), S. 157.

ランクのポストを引き継がせ、編集の仕事に貢献してくれているラドーとの間にひびを入れたくないという気持ちがフロイトにあったからなのだろうか。いずれにせよ、フロイトはラドーの論に反応を示さなかった。

しかしながら、ラドーのメランコリー論は、母子関係を主軸においてメランコリーを捉えなおした画期的なものである。クラインやジェイコブソンのメランコリー（うつ病）論に影響を及ぼしていることを考慮に入れば、この論稿は見直されてしかるべきものと思われる。また、本論では十分に考察することはできなかったが、二重の体内化というラドーのラディカルな主張は、寄る辺ない存在の自我がナルシスの満足（愛）を超自我に求めて止まないような自我の超自我に対する依存の問題をフロイトの論よりも深めたものだと考えられる。ラドーのメランコリー論は長きに亘りその存在がほとんど忘れ去られてきたものだが、メランコリーの精神分析的研究に大きく寄与したものと言っても過言ではないだろう。